

り余英國欽差館より後事する始と数年
 然るに洋文ぬ至るに目一字を讀むを
 る能の以耳片言幾聞知する能の以鳴
 呼何そ其賦性の迂よとて且拙なるや
 一日慨然以為く天下棄物なり牛渡馬
 勃敗鼓の皮猶且用を為に余り如きの
 莊周の所謂樗材なるもの也豈天地の
 愧きらんや縱に一字片言を辨別する

能くするを朝暮親炙の間其行往進退
 注意せむ己を裨益を得るの之を
 以て童蒙の談柄に供せし老爺関花
 猿蟹争鬪の俚話に猶勝る可しと以茲
 了於て其為以所を視其倚る處を察す
 るよ洋和地を異し以と雖も人情よ於
 る何ぞ霄壤の別ありんや其欲する處
 の一ちり衣の華麗を欲し食の膏腴を

欲し居の安逸あんゐを欲を只彼我の別わかり
 と彼をゆ致々いとて勉て己をが欲を
 る所を遂んと欲以我淵ふり臨て魚我羨
 むの徒とよ非ざる也其性しやうとるや古人論
 徑行直情きやうかうと云ふ此四字最形容
 盡歩じんぷとて如何いかんとわきまの平時遊歩じゆうぷせ
 んときるの時は當り天色空濛くもう俄頃がくわん
 雨ふらんとせが先づ杖鞋じやうがしを擲なつて陰かげ

晴せいきト以ぞこを我の性しやうなり彼かれに於ては
 然らば其期きり臨のぞんでや天の晴陰せいゐんり關せき
 ずひ駭おそ々策さくと散ちびてを謂いゆる徑行きやうかう也
 又一事を擧あげて彼かれに問とは定説考據ていせきかうこある
 よ至ては瞭然りやうぜん辨解べんげ一言を餘あまらば其審しん
 らわくごものハ断然だんぜん知らばと為なす
 こを謂いゆる直情ちきやう也凡洋人ひやうじんに接まさる者
 此意このいを射認ていんして以余おのれが言の真偽しんぎを辨

蓋天文地理政体の如き其大目
 了至るの洋書を涉獵して以て一々
 知るを能く然も行住坐臥の間瑣々
 をも小車に至ての固より書籍了編述
 せし故よ小車了於て却て彼をが軽侮
 を受け且憤怒を生ぜしむる事何り近
 く擧て云りんよ彼の立を以禮と
 と坐するを以て禮と彼の帽の脱を

教を以て禮と我の冠の脱せざるを
 以て禮と彼の我の國に航来し歲月を
 経るに至るの國体を辨し事情も亦隨
 て識得るを其配意と雖も輒近
 航来の外人を待り我國の禮を以てせ
 が彼了於て不滿の意を懐くや
 云ふ可らる故に聞見する處の一二を
 記して以て寒境孤村に僻在する樵父

牧童の侶余と其臭を同ふる者示
 さんといふ素より遠く歐洲を履き博く
 洋書を讀の士君子供を辱きよ非以
 請紀事の微劣なるを笑ふ事ありと
 明治六年癸酉の夏日 梧陰
 深處了稿と允ひ

晚香書屋主人

東香居

西遊記

のよめを巻上

岡本純編輯

人の容貌の散髪して鬚を延し知ざ
 るものゝ懶惰にして斯純如しと思へりこ
 き然るより非以其衣服容貌文飾車の我
 國の人より用心を用ひ日々入湯する等の
 車の固より云ふ及が食後必手や
 口洗ひ又暑の折より日の中より二度も三

度亦和衣を着換る事也其鬚の蔓延たるも
 外より見る時の平時剃刀を以て用ひて生
 髪を剃りて置やうあるも此鬚を剃るに
 鋭々の数奇くよて両方の頬も残るもの
 あり頤の上下も残るもの或は唇の上下
 のも残る人もあつて一様よりの難し其
 鬚の間を日々剃除て此の毛よりとも出
 ぬ我國の人の五日め又の六日め剃髪小
 同く梳上る事もなく頭垢紛紅の髪をよ

して居人の髪を剃りて髪を剃る事也手の爪とて
 少くも延びて直り剪又爪の間を掃除
 する道具ありて毎日垢を除る事也故に西
 洋人の却て日本人の疎慵なるを嘲むある
 洋人我國人の散髪の突立しを見て黒毛の
 眉剃りし洋服を着し姿の不揃なるを見て
 猥雑の冠をかむり如くと云ふ誠し恥し
 き事なりや然るを我國の風俗よて衣履
 きを整頓手足を洗ひ奇麗にする人を遊治

即とまきせども其理もたき車也顔や手不潔
 たる禽獸了同一と西人平生余も語り
 一我國よての遅く寝晏く起るものを以懶惰
 なりといきとも彼國ふての大有異なりて
 平時夜の十二時後寝起るりの八時又の
 八時半頃也中よの少一？速き人も遅き
 人もあきども大概此のどし思ふ午の御
 用又の自分の用をり夜も入ての世間も
 寂然して心も清澄時よて讀書り便よ多

必も自然と寝る車も遅くなりて起る車も
 晏るるなり

一毎日三度の食車の朝に至て手擧るく半熱
 の雞蛋一ツ二ツと麵包の少も食するの
 也午飯の種くあきども中夜餐を以第一
 とする也故に客を招ふに夜餐を馳走する
 も餘程丁寧の饗應なりと知るべし
 一彼國の礼よて客をよて夜膳を出以時の必
 次礼服を改る車なり午餐の客来ては服を

改^{カウ}以^イ或^ワの客ありて三四日も滞^{トウ}留^{リウ}せしむる時の
 客^{キヤク}を^ヲも^リの^ノよ^リ亭^{テイ}主^{シュ}人^{ジン}礼^{レイ}服^{フク}を^ヲ着^キせしむる車を
 ま^マづ^ズ断^{ゼン}り^リ夫^フと^トい^イて^テ主^{シュ}人^{ジン}も^モ服^{フク}を^ヲ着^キ換^カる^ル車^{クルマ}
 也^{ナリ}又^{マタ}婦^メ人^ニの^ノ客^{キヤク}何^{ナニ}も^モ時^{トキ}の^ノ同^{ドウ}坐^ザせしむる人^ト烟^{エン}草^{ソウ}を^ヲ
 喫^クば^バ是^{コト}を^ヲ西^{セイ}洋^{ヤウ}より^テの^ノ婦^メ人^ニの^ノ絶^{ケツ}て^テ烟^{エン}草^{ソウ}を^ヲ喫^ク
 ぬ^ル故^ユに^ニ傍^{トウ}より^テの^ノ人^トの^ノ烟^{エン}草^{ソウ}を^ヲ吸^クひ^テ失^シ礼^{レイ}な
 る^ルと^スる^ルより^テ起^キま^スる^ル者^{モノ}あり^テ後^{ノチ}

一^{ヒト}西洋^{セイヤウ}より^テの^ノ客^{キヤク}来^キり^テ談^{ダン}話^ワせし^ル間^マ主^{シュ}人^{ジン}あり^テ
 も^ノ時^{トキ}辰^{チン}鏢^{ビョウ}を^ヲ見^ミる^ルに^テ失^シ礼^{レイ}の^ノ事^{コト}を^ヲ見^ミると^ハ是^{コト}

を^ヲ主^{シュ}人^{ジン}時^ジ計^{ケイ}を^ヲ見^ミる^ルに^テ客^{キヤク}が^ノ帰^キる^ル時^{トキ}と^ハ催^{サヒ}使^シせしむる
 様^{サマ}も^モ當^{タウ}か^カら^ズなり

一^{ヒト}彼^{カノ}國^{クニ}より^テの^ノ客^{キヤク}何^{ナニ}も^モ主^{シュ}人^{ジン}も^モ客^{キヤク}も^モ便^{ベン}所^{ショ}より^テ行^ウ車^{クルマ}
 を^ヲせ^セび^ビ然^シき^キども^モ三^{サン}時^ジも^モ四^シ時^ジも^モ過^スる^ル中^{ナカ}より^テ
 堪^{カン}る^ル能^スむ^ムざる^ル車^{クルマ}も^モ何^{ナニ}も^モ主^{シュ}人^{ジン}の^ノ餘^ヨ車^{クルマ}が^ノ假^カ
 託^{カク}別^{ベツ}室^{シツ}より^テの^ノく^クふ^フり^リより^テ便^{ベン}せしむる^ル客^{キヤク}又^{マタ}の^ノ
 同^{ドウ}席^{セキ}の^ノ人^トも^モ至^シて^テの^ノ間^マ堪^{カン}難^{ナン}車^{クルマ}あり^テと^ハ云^イふ^ル我^ガ
 國^{クニ}近^{キン}来^{ライ}御^オ布^フ令^{レイ}あり^テ衙^{ギヤ}衙^{ギヤ}上^ウふ^ルて^テ猥^ワり^リる^ル小^コ
 使^シを^ヲ禁^{キン}せ^セら^ルる^ル然^シる^ルも^モ人^ト々^ト此^{コノ}禁^{キン}令^{レイ}を^ヲ難^{ナン}

儀の事よ思ふもの何れども西洋の例に比
 較せし更り窮屈ときるよれたりざるべし
 一都て人の前より愛をせざる固より失礼の
 事をせざるも西洋に於ては放屁と同くして
 失礼の至極なりといふ

一我國の風習よて人の衣服の華美なるを見
 せむ賞賛し又甚きり至ては撫摩あとして
 賞むものありども敢て失礼の事とせざん
 然るに彼國に在ても大に失敬の事とぞ故

了我が國風を以て彼に交際の意外の謗を
 受る事あり

一外國人と對話する其語の通ぜざらん事
 を厭て當時横濱詞と称する
 語を以て談話するものあり外國人の方よ
 ては此詞を甚嫌ふ事あり又隻言半語の西
 洋語を識する人の前後不辨ぬ詞を以て談
 話するものも是亦至て忌憚るなり洋語を
 識ざる人の則日本語の純粹して話するを

善くは彼等の日本語を知らざるも我の洋語を辨じると同轍ことなきが互に笑ふ可らばと英人余は語る事ありき

一西洋よりては一月一日以て更なる祝する事あり又我國よりて是を以て祝する五節句など稱するもの無元より言及する只十二月廿五日邪穢の誕生日なるを以て毎年祭祀を以て車なり此日上より下に至るまで職業を廢止祝宴を設け恰も我國の元

且の如く其他は自分くの誕日を祝ふ事を其身分も應じざる事なりとぞ

一我國人日曜日を以て西洋より在ては上下とも集宴遊行の日なりと思ども彼國の人も聞き遊歩などする中より以下の人もて高貴身分の人に至ては終日閑居て邪穢を祭ると云り
一我々俗習より短答の時より然らばと雖も永晝の時に至ては茶を飲林葉又ハ餅養

ちどを喰ひ點心ちんじんと云ふもの多し西洋人の
 三度の食の外は決して餘の物を喰ふはさ
 まども午晩ひるばんの食後じくごは必を餅もち糞くそ菓實くだものとも
 併せて一時は喰ふ事なり惟は不時は物を
 食するに閑まひらを費つぎをを厭いとふの意よりふし過あや湯ゆ
 かりん

一西人酒を嗜たがざる者鮮すくし自ら真まの下量かと稱い
 する者と雖も我國の中量ちゆうりやうの上なるを彼
 の酒は我の茶も同じて客来まは我風わがふうして

茶を供するは彼の風にして酒を出は故
 了うま性質しやうしやう自然了酒氣ふ慣熟くわじゆくて多量了至るな
 る可し

一西洋よて四時の花草中最も愛するは椿と
 百合花の二種なり故は彼の國よては椿花
 一ツの價一弗ドル又百合花一株の價其貴きり
 至ては五十弗ドル位ありと云ふ之をよ因て其
 品の鮮あくは愛あいする事ことの甚こきを知る可
 し蕃ばん被ひも亦是をよ亞あと雖も其品の多きを

以て花の價あひも至ては十分の一もも至らば
と云ひり

一凡そ諸疾病しよやまひよても恐おそざるもなりと雖西人
の最も忌憚きらふの瘟疫痘瘡いんげんえんそうの二ツあり實じつに此
病やまひを罹かかる者も十と七と八との死ぬる事なり故
に此病やまひを患うる者何なんれも親戚朋友しんせきともだちと雖も決
して未なく尋たづねるものなり又不幸あふまりて死しむ
るもの何なんれも時ときに衾やぐ柩い衣服いふく臥ふ床とこ椅子いすに至いたる
まじく焼却やけどして一物ひとものも残のこさず以もつて之これを餘毒あまのりのつ

深こくを恐おそる也然しかども我國人わがくにんに在あて
はさぬと辨意わづらひるものなり

一西洋せいやうよて妻つまを娶めとるに父母ふぼの命いのち又または媒人まいたりを
とを用もちひ以もつて男女おとこ互あひに娶めとるべし嫁よめをばつと
相約あひやくして後のち父母ふぼも告つげ其許可ゆるしを受うて婚く姻いんし、
更さらに官くわんも願ねがふ等らは元もとよりなり然しかども自
分の寺てらも至いたり僧そうの教誨きょうゑを受うけ又また經文きやうもんを聞き
然しかして其友人そのともだち兩三名りうさんめいより我等われら此こゝ兩人ふたり夫婦ふうふ
とたりて其保證かひあはせと云いふ書面しよめん二通ふたつを認め

其所の官長に於て何年何月何日余の面前
にて確然と夫婦の契り書を添
捺印をかり一通の之を官長の簿帳に編
入一通の之を夫婦に依て後日離縁
せしむる事ある時の公裁を願ひ裁判を受
け離縁の證書を與ふる時又前の如く其
所の官長に於て契書をかり故に離
縁と云ふ事万人の中一人もなきよふ
に若し是れあるに密通に限る女の方にて夫

の他の女と通むるを知て去時の夫より終
身衣食の料を送るを以て例とて又女の方
にて奸通する事露頭するに苦役等し處を
する事あると也然るに我國擔夫垢工の如き
も朝も東隣の夏女に娶り夕も西家の婿
婦を引入るやど度々嫁娶する者を見な
定て笑もい謗りもなきや
一若し男女互ふ夫婦の約束をかり婚嫁の事
を父母も告る小及で中よの両親不得心

て嫁を許さるる時ハ男女相携て他國へ之るものありとを然も何れの國に在ても少年輩の痴情ハ同き事知る可きなり。婚禮をやるに必も午前十字より十一時までに以て定刻と以當日ハ親戚朋友等を會し酒宴を設る車ハ我國の如く雖も歌舞管絃等の車の絶てなく恰も日本の舞臺の如く客ハ沉重し寂然とまゐるを例とせんと六つ

一 彼國官位あるの入屬吏かたり挨拶するに帽を脱び又椅子に踞しまゝして起立は然るに屬吏かたりの妻来る時に必帽を脱ぎ椅子を離て待遇は又客何れも有て團樂食する時膳を配るに必婦人を先り高貴の人一坐り列り居ると雖も却て後膳を配る事なり彼國もて婦人を尊敬せしむ此等を以て大概知るべきなり

一 我國にては金錢を賭する勝負車の古来よ

遠西の風俗

九

り嚴き制禁ありて若も犯者何れも其科
 の輕重も從て杖刑又ハ徒罪等ヲ處せらる
 るや然るも西洋にてハ上下の差別なく
 公然も此慰を以事たり則春秋兩度の
 競馬ハ其慰の最魁なり者も其
 玉突。玉投。花牌の類數るも暇あり我國人
 あり之を見せば不審なる様も思へ
 謂ゆる自主自由の權を與る所なる處を平
 我國官制公署に在てハ威儀を整へ言語を

謹く更に一車たりとも餘談も及むざるを
 例とひ然るも西洋に在てハ官廳にて餘閑
 何れも口嘯を吹又ハ歌をうとひやどを之
 を亦前ヲ謂ゆる自主の一端あり起るや
 一英國の龍動にて出火何れも報知ヲ打鐘の
 數りて何番の區あるを知る縦ハ第一の
 區出火あり鐘を一ツ打ち又第二の區
 鐘を二ツ打つ其他の押て知る可く我府下

一 於ても此法の如くせば便利なる處
 一 英人の編集する會話の未だ我國人の辭を
 評し云へる先づ一ツの事を擧て日本人
 質問する徹底不知と雖も如何おぞま
 さいと云ふ可うといふ前りの記臆たるを
 後の忘るゝとの辭よして自ら其非を掩ふ
 の意を含めりとあり顧り其弊癢やと云
 ふ可らび外國人へ接する者の反省をき所あ
 る

一 一日馬丁洋人の館へ来て馬を賣んとせし
 洋人蹄鬣を熟視して二三度運動を可し
 と云ども馬丁更へ答へび又運動を可しと
 云ども又答へび外人の兼て性急なるもの
 故自ら立て書を取て運動せし時馬丁余
 へ云へるは彼を常ふは日本語を以てせし
 今日のみ洋語を用ひし故解し難し思ふし
 運動といひきあるくの義なりやと余之を
 を聞て思ふは失笑をきば外人何故笑ふや

と問ふより、辞の齟齬たる云々を以て答へ、絶例せし車あり、此輩の如き素より軽賤も、のりて善悪を論ぶるより及ぶるべきとも、又此等の人なりと云ふ可らば、何ぞ外人の侮を受ざらんや、洋學も亦讀ぶべき事とあり、一西洋より童子の遊戯、竹馬、鞦韆等尤も身体を強壯する事、を以て決して無益の戯をいふべき、大凡武事の一端に属せり、余近頃横濱に在て、洋童の遊戯を見る、小封

土を作り六七人の童子半、其上に登り半、其下り居り互に喊声をあげ、格闘をせり、勝者小壇の上より大声して、城の主は我を一人といひて遊ぶ、我國よても稚童の戯是れ、準擬とも山の主は一人といふて遊ぶ、車あり、山海萬里を隔と雖も略似する事、も何れものとも覺ゆ、一女の思は土偶人を玩弄、或は花壇を建築、又の婚嫁やどの様をやり遊ぶ、車は我國の女

の子と異ことなるもあゝ然しかきども其こと異ことなるもの婚よめ
 嫁よめ車をやうも衣い裳しやうと飲いん食じきの道みち具ぐとを同どう
 敷しきよ決けつして列けつ排ぱいを造つくり隔へきて之これを置ま又また取と取り
 る時ときも其その筐かを別べつり若わかし誤あやまちて衣い類るいの側そば
 膳ぜん扱あちども並ならべ又また一いつ箱この中なかへ雜まて扱ある
 もの何なに色いろが皆みなく手てを拍たて其その乱らん雜ざなるを笑わら
 へり我國わがくにの子こ供どもかどか更さらし頓とん着ちやくせぬ事ことな
 と

一 西洋せいやうりて何なに品ひんもよろらば種たね物ものを包つつみ其その袋ふくろに

何なに月つき播ま種き何なに月つき生なし花はな咲さ何なに月つき實みを結むぶ
 と云いふ事こと茂しげ記き載ざいをく車くるまかゝり頂ちやう日じつ一いつ洋やう人にんの
 花はな草くさを載う植ちるを見みるし傍そばに書か籍せきを置ま之これを
 を見みるがら水みづを注そぎ又またに培こ糞ふんをやゝあどけ
 余あま是こゝをこゝ見みて思おもふし此こゝ法はの如ごとくせし何なにも
 知しらざる者ものもして花はなを作つくるも容ゆる易ぎなる車くるまも
 て便べん利りなりと云いふ

一 我國わがくにより西洋せいやうより價あひの貴たかき物もの品ひんの中なか茶ちや蛋たん
 卵か紙し生せい糸いとの誰たれも知しる處ところかきども麻あしの如ごとき

も又其價三層倍なり紙類の元より我國と
 種類も製し方も異なりとも先づ我紙と品
 格の相似する者を以て彼國の人を問ふよ
 彼をこれ五六倍の價なり且我紙の軟薄し
 て破裂ざるを以て殊の外感賞せり其他何品
 は限らば物價の二三倍貴きを覺ゆ
 一英國よりて官賣の遊行の四季の中大抵夏日
 暑を避るの節を以て多しといふ其遊行し出
 るや別段政府より願ふて許可を受るふ非ら

は只長官の聞濟又は同寮に附記あどまざる
 のみ也極暑の時も當つては一省の中總一
 一人を留めて残らん出る事何れとぞ貴族
 の者と雖も自國の遊行の勿論縦は外國の
 航海ととも敢て官より願ふも非らばと云へ
 り我國法より依て見れば甚簡便の事よりて
 其自由の權を得る實は羨しき事とおもえ
 るゆき西洋人の知識を廣め文才を長むる
 所以なるべし

一西洋よして小児を育養るゝ高貴の人又豪富
 の家よして我國と同トく必び乳母を抱つ
 て養育するを色ども貧家よ至ては我國と
 異なる事なり其母自ら養育を然るども夜
 寝るよ小児を父母の間より置事なり傍り小
 ちる臥床を設け之り寝しめ乳を與ふるよ
 必び時を定め大抵一時り三度位なりとぞ
 我國の如く泣けり即ち飲しむる事なり且
 上下とも生きて五六月頃よりハ牛乳を與

ふる事と云つり

一西洋人の強記よきハ誰も知る處なりとぞ
 就中地理の委しき事ハ實よ驚べきなり先
 年佛蘭西字漏生戦争の頃彼の方より日々
 電信おて報知あせむ余等も向て其戦争の
 形状を説き先づ筆を採て兩國の地圖を畫
 き一々指點せし其勝敗の由て来る處を
 談ぶるよ明瞭しりて今日の前る見るか如
 し又去春一洋人と伊豆相摸の間を遊歴せ

一は兼て其地圖を携へ行頼朝北條等の古
戰場に問ひ二氏の興りより亡び迄の事
跡未由を明細に究め且旅日記に留るる山
川の形状又土地の肥磽等を以て以余其故
を問ひて本國の地理社中へ送るなりと云
ふ實に意を用ひたりと我國人の族中日
記などに見るより多くは逆旅錢の高き低き
日々天氣の陰晴等の事の事にして彼國人の
注意する處と大に矛盾する事なり

一我國の戯きよ人を朝弄する時下目錄に指
よて明けのうんべいと云ふ事誰も知る所
なりと云ふ西洋人の朝弄する時の手を開き
堅より鼻の先つ立つ之を我々國よての
うんべいと云ふ處に用ある戯きなり
一西洋よての絹糸高價よりて絹糸のみよて
織する品の子キスタと唱ふる襟に掛る
品のよして其他の必以毛又木綿糸を交
ゆるとぞ我國より縮緬糸織の類を用ふる

を見て羨むもの甚多し

一英國よりていりける暑中めくも蚊の絶よ
 して天竺に往て初て蚊帳と云ふものを見
 して云ふ人あり又い日本に渡りて初て見
 して云ふ人あり然るが氣候の我國より比
 せば餘程寒き國と見つゝり

一我國よりて下賤の者の子弟も名を興ふる
 更よ縁故もあき車りて推兵衛や八兵衛な
 ど名つくる者多し然るよ西洋よてもス

三ツと云ふ名に此推兵衛やどよ同く何も
 知ぬ者の多く興ふる名よりて「スミツ」と唱
 ふる者よ高貴の人必ばなりと云

一砂糖の只甘蔗より製するのみよ非び西洋
 よりての蒸菜の根より採り又ハ楓の樹よ
 りも之を採るはより油る棒砂糖なるもの
 も此蒸菜より製する者なりと云ふ

一我國よりてハ暑中の服の敷奇屋又ハ紹やど
 成丈地薄の品茂用ふるを以て人も賞し己

きも善と云然るは英國よては斯の如き服
 の甚嫌ふ事よて高貴の人なると決して用
 ひざるよて若地薄の衣服を着る人を見
 きぞ蚊蟀籠と云て大よ笑ふ事とぞ
 一人情世態了於ては四海萬國皆同き様なり
 ども瑣末の事よ至ては大有相違する事な
 り余が知己の洋人頃日妾を抱へし其妾
 よ向つて「ユールアールアツドツク」と云つり
 妾素より洋語を知らざれば余も問ふ余も

亦解せざるを以て彼も問し彼微笑して
 夫き「オマイハ家鴨ノヤウタ」と云ふ事な
 りと云は妾傍りて之を聞き甚憤恚し様子
 かり余此女の意了適せざるやと問し誠
 り氣よ入しと云ふ然らば何故云々云々
 や日本よては大有婦人を醜し且罵る
 の辞ありと云へば夫も日本と大違ひして
 我邦よては婦人を美し且賞賛するの通
 言あり西洋よては婦女子の姿の胸幅の露

大して腰の大ききを以て極て美姿と云ふ故
 了抑腰の女子ハ缺線を以て下裳を張り態
 と腰を大したる者間くありと云ふ是れ於
 妾も漸く得意の色を顯せり余此言を聞て
 暫時抱腹絶倒以
 一昔一是班牙國の中よ「アラレゴ」と云ふ國あ
 り其女王の時了當りて下民の妻其夫の同
 寝甚しきを愁ひ訴ふる祭日と雖も十度
 より少き事ありとびと歎願一々を女王則

其夫を督責一日六度より過可らびと嚴
 命一玉ハ且後世の模範なりとて普く國
 中へ布告せしとぞ都て西洋より往古の
 教を聞くは妻と同寝するを勤の操とせし
 ものと見ゆ其教を學問執行の爲なりと
 十日より同寝せざるも苦しあらば又職業
 の爲なりと七日を限りと云ふ或ハ故障あり
 も七日より兩度を欠可らびとて百方教法を
 立つ是等の事の我國よても古来より曾て

聞きこざるも夏なつなり

一西洋と辞ことばの替かると雖なも花の名ながどうも同おじ
 意いの者もの何なにり我國わがくにより長なが春はる蕃ばん薇ゐと云いふ則すな長なが
 き春はると云いふ事ことより四よ季き咲さの意いなり此こ花はなを
 西洋せいやうよりてハムンツレムンツレと云いふ則すな月つき々の
 ちらといふ事ことより是こゝ亦また四よ季き咲さの意いなり又
 花はなの黄き色いろ大おほ輪りんよりて日ひの照さひ方かたに向むかひて
 咲さる日ひ廻まり花はなと云いふ何なにり彼かの國くによりてハソソン
 フラフールと云いふ日ひ花はなと云いふ事ことなり又また朝あさ貞さだ

の事ことを「モーニングフエイズ」是こゝを亦また朝あさ貞さだと
 云いふ辞ことばなり其他その他此こゝ等らの類るい猶なほ何なにるべしと思おも
 へる

一西洋と我國と品しやうも辞ことばも同おき者もの何なにり則すな艾あ烟えん
 草くさ又また洋やう肢しをどうり着きる「ががん」と云いふもの何なに
 り是こゝを「ががん」と云いふ又また小せう島じまを「ががん」と云いふ
 と云いふあり又また同お名なあり洋やう人にんの語ごりハ艾あり
 日本語にっぽんごの西洋せいやうより移うつりしもの見み也なり其他その他ハ
 洋語やうごの日本にっぽんより移うつりしもの可べしと云いふ

り

一 西洋よての我國の如く證文やとよ自方の印形いんがたを用ゆる事や、都て貸借かいく又何なになり、後日證據しやうこもある可き書面しやうめんの自方の姓名せいせいを自筆じひつゆて認る事や、是を我國の印形と同一事どういつして後日の保證いしよとなる事や、とて西洋よての百事規則ひやくじきぎありて凶事きんじも往復きうふくする書簡てうかんの四方黒く小縁せうえんをとりの紙を用ゆる之を弔紙しやうしと云ふて平日の手紙てうしの

用ゆる事や、若く持令もちあしの紙や、くして凶文を認る時ときは自ら小縁せうえんを黒く染て用ゆる又吉事きちじの都て色變りの紙を用ゆる事こともて白紙はくしのとなりと云へり我國人は是を知らざるとして西洋店しやうてんよて調しらつるとして用ゆるを洋人やうじん不祥ふしやうを笑わらはん

一 英國いんこくよて竹たけの何なにより一種いっしゆもや、依て常つねに器きよ用ゆる只機ただきの棧せきの竹たけをもちきき、滑なめりたるを必かならずに用ゆる其他かほか釣竿つりざんより云

り又蟬せみをちりて蚊あぶらも何れとも我國の如く
品類ひんるい多ありはとて好事こうじの洋人の少く愛まし
る者翅はねの蟻あまを見付き採とりて乾かし置おて靴くつ
弄あそせり風土ふうどより思おもひつゝぬ處ところを愛まり
たる事何れもものなり

一英國いんこくに於ては男子十八歳以上に至らざるを
礼らい服ふくを用もちゆる事なり故に我國わがくにより來りて
幼童わらわもては礼らい服ふくを着まくを見て其風俗ふうじやくの
異なるを知しりといふ也

一西洋人の館かんに至りて其家より妻ありて先づ
其妻より揖いつゝ然しかして後主人のちのしゅじんも及およぶを例れいと
以もつ然しかき我國わがくに風ふうを以もつ先づ主人のしゅじんも揖いつ後
に妻つまも及およぶ者ものの礼らいを知らぬとて笑わらひりと
ぞ彼かれを接あはさるるに心得こころえなき事なり

一西洋の例れいもて喫く飯はん中ちゆう他たより書簡しよかんなりとの未
る時ときは同食どうじきの者ものは失礼しつれいを謝あやまり然しかして開封かいふう
は若坐中わがくわちゆうに婦人ふじん何れも時ときは必かならず開ひらく事ことなり又
スツすつフふ我國わがくにの吸すを食くるも婦人ふじんの客きやく何れも

時々吸ふ音のせやうもやう甚注意する事なり
 吸ふ音の聞ゆるに至て失禮の事とぞ
 一西洋より婦人を敬ふ事毎章反復して掲
 げしきども近頃一の驚く可き事を聞たり
 都て官員なるもの新し妻に娶はる婚禮の
 當日より十五日の間は官長の許可ありて
 公然官廳より出づる例なりとぞ是等の事
 我國人の夢いども知らぬ事なり
 一我國の桃太郎や古切雀などの咄と同く西

洋もても童子どもの話の中も自然勸懲
 の意を含みしもの多し昔親友兩名りて旅
 行し深山の中より至り大なる熊あり二人
 逃るる路より一人は俄然木より攀きり
 一人は樹より攀る車を解せざれば驚愕して
 遂に路上り氣絶せり樹上の人之を見て
 友人の命熊腹に没せしとに然るる豈
 人んや彼の熊倒し一人の傍に来り何人
 語をきり立去るる是に於て樹を下り友人

遠西の物語 三十三

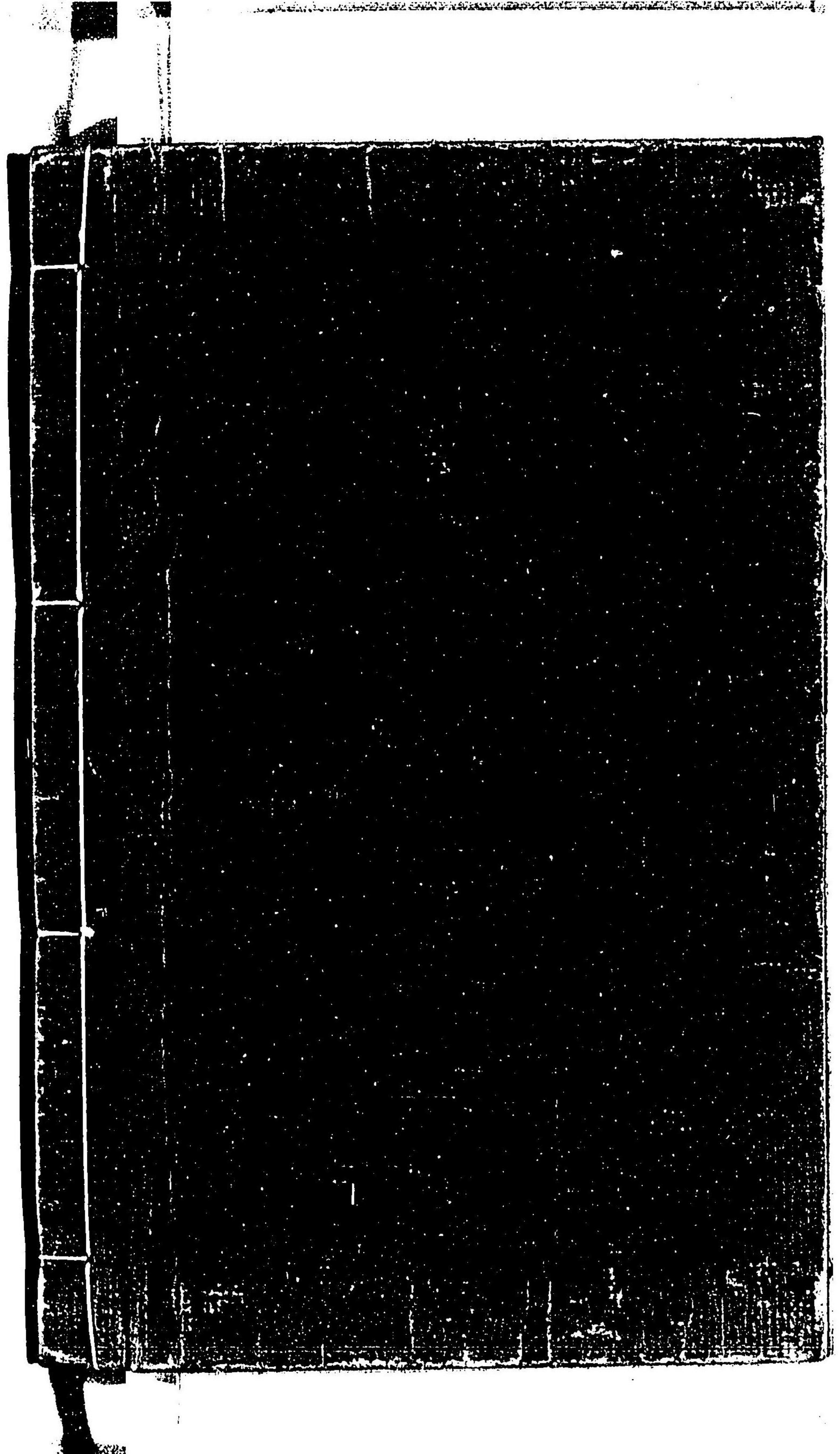
の恙なきを祝し且熊の話をせし何事なり
やと問ふ今熊の語りし餘談ならび向
後斯の如き信義なき者と必び旅行を極の
らび眼前友人の死を見るを見て己のく安然
とて樹上よりゆるるゝ實は友誼を背くなり
と云て立去りぬと語りたりと云ふ譚あり
此童話の趣向は虚より實に入りて朋友の信
義を失わざるや童蒙は教しものなり之
を因て見るは何處の國より幼時より

善く赴く工夫を凝らすものと覺ゆ

一西洋人の我國よ来りて何品も依り都て
食せざるものなり然きども鰯魚沃庵漬
り至ては大凡食する者を見れば又我國の食
類より人々殊の外賞美するの生鮭生鱒の
二品なり西洋も此二魚ありと雖も我國
の如く美しめて且多うらびと云つり

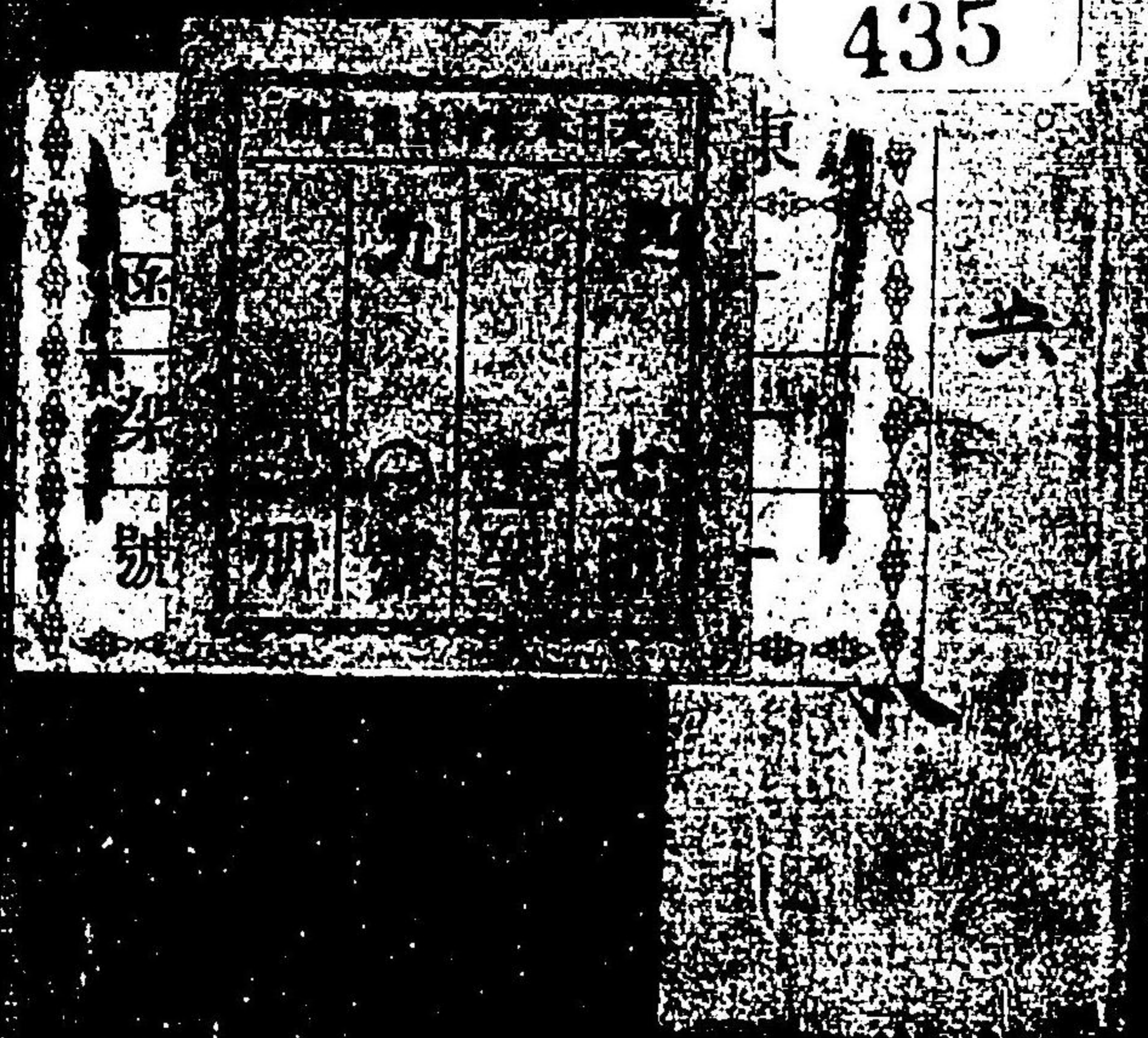
遠西の事情と
卷之五

外交
際客
遠西の事情と
卷之上



特43

435



027376-001-7

特43-435

遠西の手ぶり

岡本 純/編

上

M6

ADJ-0135

